資料2-2
科学技術・学術審議会　学術分科会
人文学・社会科学振興の在り方に
関するワーキンググループ（第2回）
H30.11.14

人文学･社会科学の国際化推進～実践の一事例から

科学技術･学術審議会　学術分科会
人文学･社会科学振興の在り方に
関するワーキング･グループ

2018.11.14

京都大学人文科学研究所

竹沢泰子

おことわり

- これまでの資料　大きな方向性についての重要かつ概念的議論

  → 今回はボトムでの事例　具体例から人文学の国際化の必要性を

- 一個人の経験に過ぎない。 参照事例として。モデル化には適さない。

- 組織を代弁・弁護する類の見解ではない。

- 短期間での準備

自己紹介（国際発信との関連で）

- 専門：文化人類学（学位）、アメリカ研究　とくに人種・エスニシティ（民族性）、移民
- 関心：人間のカテゴリー化、名指し、偏見・差別　（学際的にアプローチ）
- 人文研着任後、共同研究　　科研：基盤(B)（2001～）→（A）→（S）→（S）（2016～）

- 既刊英文学術書（＜和書）：
  - ・単著　Cornell U P 233p.
  - ・編著　Kyoto U P/Transpacific Press 252p.
  - ・共編著（第一編者）　U of Hawai'i Press 448p.
  - ・（最新の共編著3冊シリーズ（東大出版会）　執筆者4割弱外国人12/31人）

- 現在準備中の外国語での学術書（＞和書）：
  - ・編著（英語）論文集（印・韓・日・シンガポール等）
  - ・共編著（英語）論文集（米・英・印・アイスランド・エチオピア・日）
  - ・雑誌特集号　共編（英語）米国の雑誌にプロポーザルを申請中
  - ・雑誌特集号　共編（仏語）フランス国立社会科学高等研究院
  - ・共編著（仏語）論文集　フランス国立社会科学高等研究院
  - ・その他（和書や英文雑誌論文など）

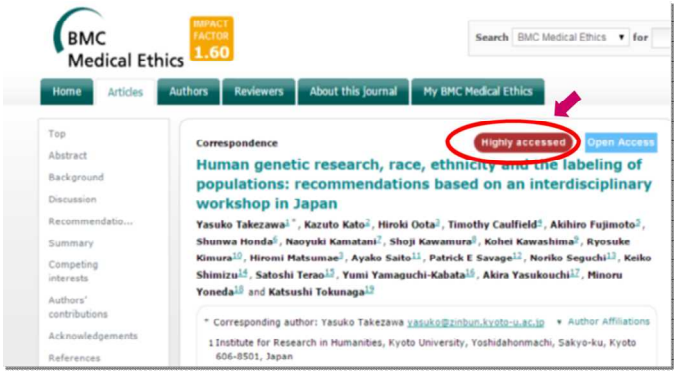
TEPSIS　　京都大学人文研

学術交流提携

- 海外での授業経験：MIT、カリフォルニア大学サンタバーバラ校など

事例１：文理融合国際共同研究

- 20年近く文理融合
- トップレベルの
  遺伝学者・自然人類学者らの協力
- 社会発信も一緒に



Takezawa et al. 2014　20人共著
ゲノム研究の倫理問題：集団カテゴリー

人文系

ヒトの多様性についての正しい理解
（「違い」をヒトの進化や生物多様性から考える）

文理融合持続の鍵

相互に啓発・恩恵
一方向ではない

一緒に考え創り上げる
面白さ・楽しさ

理系

タコツボ化の抑制
社会の受け止め方の指摘。
真実が一つでないこと、多様性が重要であることの広い認識。
（理系分担者二人の声）。

現在の事例：国際文理融合研究の流れ

現在のテーマ：遺伝子検査ビジネスと
「祖先ルーツ」（人種・民族との関連で）の日本と北米との比較

2016 夏
問題提起
文化人類学者ら

共感
分担者：
遺伝学者・
集団遺伝学者

2016 -2017 夏
定期研究会
自然人類学者・科学コミュニケーション論者ら

2018.3
サイエンスカフェ

2017.10
海外から招聘
議論のなかから
テーマ選定

2018.4
国内から招聘
医学研究者・NGO代表者ら「ビジネスの一人歩きへの警鐘」

2018.7
国内から招聘
分析手法
科学言説分析

2018.11数日
海外から招聘
一緒に**方法論**の
調整 議論 分析手法
科学言説分析

2019.1 2度目
海外から招聘
執筆者予定者全員
で合宿

Kiyoshi Ota/Bloomberg

分担者・研究協力者らと積み重ねてきた研究会

事例２：日米合同研究

- 日米共同研究（19人）：京都・東京・UCLA・東京　4回のシンポ
- それぞれの聴衆との交流
- UCLAでの反響

- 研究動向の違い
- 日系アメリカ人研究の成立背景の違い
- エピステモロジーの違い
- 「立場性」の違い
- 言語能力の制限から生じる研究テーマの相違

- 共同研究・刺激から生まれた日本側の貢献
- 明治期のアメリカ移住による概念の変容
- 東アジアの地政学的視点（米側になし）
- （「文明」と「人種」・「民族」など。日中露米で考える）
- アメリカ的「階級」概念適用の不適切さ指摘
- 移民一世による日本語資料を使った研究
- 英語のインタビューによる研究も

Trans-Pacific
Japanese American Studies
Y.Takezawa and G.Okihiro eds.
U of Hawai'I Press、2016.

例：一語の翻訳が概念自体に

「下等社会」「下層社会」”lower class”

- 「下等社会」（サンフランシスコの珍田領事の青木外務大臣への手紙）を“lower class”
  アメリカでは定訳。しかしこれは概念に関わる重要な問題。

- 日本人移民が増え始めた明治中期の日本　工業化による賃金格差は東京と大阪のみ。
  それよりも地方の農業従事者の次男・三男が多かった。上半身裸。標準語が話せない。行儀が悪いなど。

- 明治初期には「下層社会」（lower class）という用語の使用例はほとんどない。
  時代による言葉の意味の変化。
  アメリカの人文学・社会科学の分析概念「階級」の押し付け。

- 階級の問題ではなく、明治初めの「文明化」「西洋化」の浸透度の問題と見るべき。
  “people of lesser civility”　（大江健三郎の翻訳者 J. Nathan の助言より）

- 中国人排斥法、香港のイギリスへの譲渡など、トランスパシフィックの地政学のなかで考えるべき（この視点は、いままでのアメリカの日系・アジア系アメリカ人研究では極めて弱い）

国際共同研究がなければ、思いついていなかった！

日本人研究者は幅広いテーマの選択肢を

- 人文学の日本人も日本語資料に頼らずとも勝負できる！
- 米国留学の日本人学生が「日本研究」を推奨されてきた現実
  日本人は、日本語でしか国際的に貢献できないのか？

- 日本人研究者は自信をもち幅広いテーマの選択肢を
  （日本語を使うテーマに限定される必要はない。
  視点のユニークさ、立場性の認識）
  語学力は特別でなくてもよい。

- 日本を含めた国際比較からチャレンジ可能？（現在進行中）
- 中世の「河原者」、スペインの「ユダヤ人」、ルーマニアの「ジプシー」
- 「特権」言説の共通点？　経済活動独占と権力との密接な関係
- 海外や国内の歴史家との意見交換　　事実確認の担保

- 日本研究ではない。より幅広い研究者と。

- 人文学の日本人研究者も国際的視点があれば、チャレンジ可能？

実験中：招聘外国人制度の活用

➢ハーバード大で
　人類学部の著名な教授と毎週会っていた中国人若手
（中国人は毎週執筆　教授は毎週コメント　→共著論文）

➢UCサンタバーバラ校で
　ブラジルの准教授　客員　共著論文
　「自分だけでは誰も引用しない」著名なアメリカ人と中国人院生の3人で共著
　（自分のデータ・下書き＋アメリカ人教授の枠組み・書き直し＋院生の先行研究）

Win-Winの関係の国際共著論文

➢現在実験中
「京大から給与　共著論文執筆の条件付き」
　人文研への3ヶ月招聘　UCBerkeleyよりイギリス国籍の社会学者の友人
　mixed raceについて国際共著論文を目指す
　弱かったネットワークづくり→ヨーロッパでの連続講演・著名な編集委員会への紹介

これまでの重要な指摘：人社系の重要性

➢「人文学・社会科学の振興に係る検討に当たっての視点（案）」（学術分科会　H30.9.28）

・「人間と科学技術と社会・文化的価値の調和」という視点の重要性

・「複数の「正義」が並立する多様化した現代社会」　新たな価値が生成される場面も

➢「学術研究の総合的な推進方策について」（学術分科会 H27.1.27）

・「国の知的資産の重要な一翼を担うのみならず、多岐にわたる精神活動の基盤となる教養や文化の土壌を培う機能」

・「多文化共生時代の到来に向けて、言語、文化、宗教を異にする人々への共感力を培う重要な使命をもつ」

・「新たなものの見方や制度的仕組みの設計と提案により、社会の変革の源泉となる」

「人文学と社会科学」一口に語れる？

- 場合によっては、「人文学」「社会科学系」を分けて考える必要性があるのではないか。
  理解されているだろうが、方策等では見えにくい。

- 社会科学：　現代社会の課題に直接向き合う場合が多い。分野によっては理系との親和性大

- 人文学：　問いかけの重要性。「人間とは何か」（人間とはどうあるべきか、どう生きるべきか）。
  価値観・概念の枠組みを作り、不断にクリティカル・シンキング。
  人間の知の不可欠な営み。

- 移ろいやすい現代社会だからこそ、根底に横たわるものが大事。
（NYT Thomas Freedman「技術の進歩が加速すればするほど、スローなもの、根源的なものが大事」

- 長いタイムスパンから俯瞰し・発言できる存在は必要。

- 学問の多様性が重要　　基準化することの危険性

アメリカでも人文系いっそう重視

- スタンフォード大学
- http://shc.stanford.edu/why-do-humanities-matter

- ワシントン・ポストhttps://www.washingtonpost.com/news/answer-sheet/wp/2017/10/18/why-we-still-need-to-study-the-humanities-in-a-stem-world/?noredirect=on&utm_term=.b27571f71de1

- グーグル社

  今年　4000~5000 /6000人　人文系・リベラルアーツのPh.D 採用予定

  “Google leads search for humanities Ph.D. graduates”

人文学の国際化

- 現在の人文学は、欧米・白人・男性中心主義
  （米国の人種研究は、1960sにユダヤ人、女性、アフリカ系が入ることにより飛躍的に発展）
  日本の視点が入ることにより、西洋中心的な知の体系が転換する可能性も

- グローバル社会の発展に向けて、新しい概念や価値観を生み出す可能性

- 現代見失いつつあるより根源的な価値観やオールタナティブな生き方の提示

- 例：中国との国際共同研究。

中国研究　単に地域研究ではない。人間社会を理解するため。
現代と異なるオールタナティブな「近代化」の可能性？
（個人、自由、民主主義、効率性といった固定的な西洋の価値体系の代替となる世界観を提示する可能性も）

文系も納得のいく評価方法

- 文系と理系の溝を深めないような、文系（とくに人文系）も納得のいく評価方法が必要
- 評価方法が欧米・理系中心的（インパクトファクター等）

多くは、

- 雑誌より学術書

- 引用数より書評　雑誌の質＋数

- タイムスパン：アメリカの学術書や雑誌論文は活字になるまで通常数年

- 英語で書けばいいのか？　多言語。日本語で深める必要性も。

- 国際共同研究はしばしばinter- でありglobalは少ない。画一的インパクトや評価は稀。

国際化を高く評価する制度づくり

- 海外では日本語の業績が、日本では外国語の業績は無視される
  両方で発信している人は体半分だけを見られている？

- 国際発信のインセンティブが乏しい現状

- 難易度の違い（国際的な質保証）を認識・評価へ
  （国内の英語紀要から米英の大学出版会まで。）

- 英語以外の国際発信も評価すべき

- 国際化を奨励する具体策？
  例：　科研の助成を得ている学会に、「国際賞」の付与を義務づける？　特に若手に。

拠点は必要　伝統・実績を活かす

- 個人が積み重ねてきたノウハウを組織として次世代に継承させる。
- 国際共同研究の支援・環境整備の必要性

- 大学共同利用機関と共同利用・共同研究拠点の差異化は必要
- 近年の大学改革を振り返ると、組織改編は組織と研究者を弱体化させてきた。
- 大半の大学にとって国際共同研究拠点は、国際研究活動の確保の重要な存在。
- 海外のトップレベルの研究者の協力を仰ぐためには、国際的知名度のある組織を伸ばしていくことが、最も効果的・現実的（一度壊れると取り戻せない）

  →ただし、研究代表者、メンバーの公募・オープン化
- 伝統や個性のある組織を伸ばしていく（規格化や集約化は、人文学の学問的発展を妨げる）。

新しい知名度の低い組織との共同研究はインセンティブが弱まる（≠エリート主義）

e.g.　EHESS（フランス国立社会科学高等研究院）

　　ハーバード大学イェンチン研究所

<u>世界中の人々が集い学術交流をする中心地の重要性</u>

学際共同研究の土壌作り

京都大学の取り組み例

学際融合教育研究センター

➢時限付きのグループユニット

萌芽的分野や潜在的に連携が可能な分野におけるボトムアップ型の研究および様々な教育・人　材育成プログラム等、部局を超えた連携・融合の必要性に対応するため、教育や研究を目的とした時限付のグループ“ユニット”を設置し、複数の部局による分野横断型の教育研究プロジェクトを実施（詳細：http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/about/）。

➢分野横断横断プラットフォーム構築事業

学際的な研究会やワークショップを開催するためのノウハウ提供・費用支援。

➢京大１００人論文

京都大学における分野横断と学内の知り合いづくりを促進するプロジェクト。

➢学際研究着想コンテスト

異分野の研究者チームで研究テーマを考えて応募する賞金コンテスト型の研究奨励事業。

学術研究支援室

➢融合チーム研究プログラムSPIRITS【学際型】

未踏領域・未科学の開拓に挑戦する異分野融合研究の新たな取り組みや企画を支援する事業。本学の研究者を代表者とする研究チーム（他研究機関、産業界等からの参画も可）で実施。これまでに採択された学際型プロジェクトは32件（H29年度4件、H28年度4件、H27年度4件、H26年度6件、H25年度14件）、そのうち研究のキーワードから文理融合と判断されるものが7件（H27年度1件、H26年度3件、H25年度3件）。

若手の国際化

ネットワーク作りの必要性

科研費による支援の充実化

- 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A））
- 若手研究における独立基盤形成支援（試行）

京都大学の取り組み例

- ジョン万プログラム

http://www.john-man.rp.kyoto-u.ac.jp/index.html

次世代を担う若手人材を対象に、海外経験等の機会を支援し、国際的な活動を奨励・促進することを目的として、大学が主体となって次世代のグローバル人材を積極的に養成する全学的プログラム「京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム」を展開。

「研究者派遣プログラム」
海外大学等での研究や国際共同研究への参画等、在外研究の機会を得ようとする若手教員の意欲的な活動を奨励することを目的として、中長期にわたり海外へ渡航する者にかかる渡航費・滞在費・研究費等を大学が直接支援。

「研究者派遣元支援プログラム」
6ヶ月以上の期間にわたり現在海外に派遣されている、または今後派遣される予定の若手教員が所属する研究室等（研究者派遣元）に対し、当該若手教員の派遣期間中における研究者派遣元の運営等業務にかかる人件費等を支援。

- 融合チーム研究プログラムSPIRITS【国際型】

研究の国際化に資する取り組みを支援。本学の研究者を代表者とする研究チーム（他研究機関、産業界等からの参画も可）で実施。【国際型】では。海外研究組織・研究者等との研究チームを形成し、研究プロジェクトを遂行するものを対象とする。

提言

- 国際化と同時に、自己努力を促すためには、人文学・社会科学・自然科学間の円滑なコミュニケーション、相互の信頼が重要。

- 人文学・社会科学（とくに人文学）の重要性、国際化の重要性を認識していることを、具体的方策において示す。

  人文学と社会科学を分けて評価・支援する。人文学については、とくに評価方法の見直し、また国際共同研究・共同利用拠点や新学術領、さまざまな支援プログラム域等における採択など（しばしば社会科学は採択、人文系はゼロ）。

- 国際化のノウハウを集約できる拠点（センター）が必要。

  次世代に継承。アドバイザー・指導的翻訳家など国際化に必要な人材・ネットワークの集結、国家プロジェクトとする。数十年の蓄積のある個人プレーで終わるのはもったいない（研究協力者とのネットワークづくり、査読の通過、出版社との交渉、招聘時のお金の使い方まで）。

- 日本だからこそ、世界の知の生産に貢献できることもあるという認識を広める。

- 若手の海外派遣（長期、苦労と楽しさ）。中堅の海外派遣（半年から一年、英文業績があれば次の実現につながる）。

- 国際的研究・学際的研究をもっと高く評価するしくみ。科研を得ている学会の学会賞など。あるいは学会とは無関係の賞など。